

## 第3章 「観光・地域振興に活用されている馬」

### 観光・地域振興

絶滅の危機から地域振興の柱へ

### のまうまハイランド

市民に親しまれる野間馬の保存と利活用



### 事業の概要

「のまうまハイランド」は、日本在来馬の一種である野間馬の保存・増殖を行うとともに、野間馬が主人公となって、市民に憩いの場を提供している公共施設である。

今治市民の相互交流と憩いの中心地となるべく昭和61年に市立の施設として開設された。この施設の最大の特徴は野間馬という日本在来馬を施設の主役として位置づけ、野間馬を通じた市民交流、青少年、児童の情操教育を行政ぐるみで推進している点である。今治市の中心街から5km程度という立地環境と入場無料という運営スタイルが地域に浸透していることも相俟って、来場者は毎年12万人前後を数えている。管理運営は野間馬保存会が指定管理者としてこれにあたっている。

野間馬は、日本在来馬8種の中でも最も小型で、性質はおとなしく力持ちである。江戸時代には300頭を超える馬がいたとされているが、輸送手段の発達や農業の機械化等により需要が激減し、昭和30年代にはほとんど見かけられなくなっており絶滅に瀕していた。そのような中、昭和53年に愛好家の方から雄1頭と雌3頭の野間馬が今治市に寄贈され、保存会が立ち上げられ、現在ではのまうまハイランドにおいて繁殖が行われており、約50頭が飼養されている。

一時は絶滅の危機にあった野間馬であるが、現在では野間馬による市民の乗馬体験が日常的に行われている。野間馬は小型であるため、3歳～小学6年生までの体重30kg以下の子どもが対象となっているが、子ども達が日常的に馬に触れあえる貴重な場となっている。

#### ○乗馬体験

引き馬による乗馬体験は1周200円で、子ども達は一人ずつ施設側で用意されているヘルメットやベストを着用して乗馬の順番を待つ。乗馬には十分に調教されている11～25歳の野間馬の14頭が用いられている。

#### ○騎馬隊キッズ

毎年、小学校4年生～6年生までの子供たちを10名程度募集し、4月～翌年3月までの1年間に月2回、乗馬練習や馬房掃除、馬体手入れ、エサやりなどの野間馬の世話や、馬具の手入れなど様々な活動をしています。

#### ○野間馬クラブ

近隣の乃万小学校4～6年生20名前後の生徒で乗馬、ブラッシング、放牧場の清掃、餌やり、外乗トレッキングなどを行っている。

#### ○ホースセラピー（※）

野間馬との触れ合いを通じたセラピー。

（※平成26年より、野間馬の保存・繁殖に力を入れる為活動を休止中）

その他、訪問乗馬による普及啓発事業、情操教育活動事業が行われている。



乗馬広場で体験乗馬を楽しむ子ども

### ○ちびっ子・のまうま祭

のまうまハイランドでは例年、「ちびっ子・のまうま祭」を開催しており、平成28年で17回を数える。地域の若いファミリー層を主な対象として、来場者も年々増加傾向にある。近年は一人超の来場者を集め、地域の定期イベントとして定着している。

中央の特設ステージでは、地域の子どもの歌（市民愛唱歌「ぼくはのまうま」）やダンスなどのパフォーマンスも行われた。また、屋台や金魚すくい、動物とのふれあいコーナーがあり、色々な楽しみ方ができる工夫がなされている。

乗馬広場では「のまうま乗馬」（午前、午後12時間ずつ）、放牧場では「のまうまパフォーマンス」が開催された。このイベントの最大の特徴は野間馬が主人公であり、野間馬とのふれあいを核にしていることである。



ちびっ子・のまうま祭の広報（今治市観光課）

「のまうまパフォーマンス」では、選りすぐりの野間馬が、フリージャンプ（障害飛越）や台乗り（狭い台の上に4本脚で立つ）、橋渡りなどのショーを披露する。また、2本のロングレーンを使って馬の後ろから馬を操作して自在に歩かせる「ドライビング」には家族の親達が自ら参加して楽しんだ。子ども達も参加してのクイズや馬へのご褒美の手渡しなど、普段はなかなか経験することができないイベントになっている。



見事な「しまなみ海道」橋渡りの演技



迫力満点のフリージャンプ



演技の始めにおじき

### 第3章 「観光・地域振興に活用されている馬」



馬の演技に見入る観客（左）と体験乗馬の順番を待つ家族達（右）



野間馬と市民とのふれあい

のまうまハイランドでは、(公社)全国乗馬倶楽部振興協会の「在来馬乗用化推進事業」により、野間馬の馴致・調教を協力して行っている。その成果の一部として、野間馬においては高度な演技を披露してくれる馬が年々増えてきており、パフォーマンスホースが10頭以上になっている。この一番の要因は、保存会内において、調教できる人材を自前で養成できていることである。のまうまハイランドの職員は、(公社)全国乗馬倶楽部振興協会の技術講習会や安全性講習会などに参加して経験を積んでいる。

従来からの在来馬のイメージは一般的に使役馬としての印象が強いが、調教次第では素晴らしい運動機動性を引き出すことが可能である。このような高度なパフォーマンスは、日本在来馬の潜在能力の高さ、今後の日本在来馬の利活用への大いなる可能性を示すものである。園長など施設関係者の感想では、野間馬がこのような多彩な能力を見せることができるようになったことは、スタッフの励みにもなり、来場者数の増加にも大いに役立っているとされる。

#### 運営体制等

〈のまうまハイランドの管理運営〉

今治市の職員と指定管理を受けている野間馬保存会職員の9名で日常の管理運営が行われている。野間馬の保存・繁殖に取り組む他、園長以下、一丸となって在来馬の普及活動に熱心に取り組んでおり、とくに市民参加型のふれあい事業に尽力している。

のまうまハイランドは山裾の広大な敷地内にまきば館、乗馬広場、第1～3放牧場、わんぱく広場、小動物ふれあい広場、いこいの場、みどりの広場、ちびっこ広場、にこにこ広場など多数の施設が自然の景観を保ちながら配置されている。同施設の運営にかかる年間のランニングコストは6,000万円程度で、そのうちの大部分は今治市からの委託料により充当されている。

「ちびっ子・のまうま祭」は、今治市(観光課)が中心となって進めており、全市的な運営、広報体制となっている。のまうまハイランドの職員が中心となって準備や開催当日の運営にあたっている。

#### 背景(地域連携、展望等)

##### 野間馬について

瀬戸内海に面した愛媛県では古くからミカンの栽培が盛んであり、野間馬は収穫物であるミカンミカン畑から搬出する上で重要な運搬手段であった。馬の背に荷鞍と背負子(しよいこ)と呼ばれる農具を載せ、背負子の両側にミカン箱を載せた。野間馬は斜面や狭い農道での重い作業を難なくこなすことができ、地域産業や農家の伴侶として欠かせない存在であったと思われる。

野間馬は江戸時代に「乃万地方」でつくられた

日本で一番小型の馬で、体高が約 110～120 cm であり、日本在来馬 8 品種の中では最小の馬である。かつての写真が示すとおり、女性や子どもでも扱える温かな性格と、重いミカン箱を急な坂道でも運搬できる力強さ、粗食に耐え、丈夫でよく働く特徴を持っている。

全国で野間馬について知ってもらうこと等を目的として、繁殖を終えた野間馬などを動物園に寄贈するなど、野間馬に会える施設を全国に広めている。平成 28 年現在、上野動物園など全国の好適な 9 施設で野間馬に会うことができる。



ミカン畑で活躍していた頃の野間馬（まきば館展示資料より）（上）と野間馬の歴史を記す記念碑（下）

のアクセスが容易になり、観光も活性化している。「のまうまハイランド」には愛媛県だけでなく、近隣の他県からも多くの観光客を引き寄せ得るポテンシャルを秘めている。野間馬は今では市民に愛され、地域を代表する代表的な観光資源の一つになっている。

### 将来展望

野間馬は平成 16～22 年頃に 80 頭前後にまで頭数が増加したが、繁殖等の問題から、現在では約 50 頭前後とその数を大きく減らしてしまっている。喫緊の課題としては、繁殖・増殖である。なお、平成 28 年には子馬が 3 頭生まれた。

農林水産省が定めている「家畜改良増殖目標」の中でも、「日本在来馬については、希少性に配慮した品種の保存及びその特性をいかした、その利活用を推進するもの」とされている。のまうまハイランドは在来馬活用に先進的に取り組んでおり、在来馬の広範な利活用に向けての拠点として機能することが期待される。



厩舎内で食事中の野間馬（集団生活に慣れている）

### 観光資源としての可能性

平成 18 年に今治市と尾道市を結ぶしまなみ海道、平成 20 年には広島県呉市と安芸灘諸島とを結ぶとびしま海道が完成するなど、中国方面から

〒794-0082 愛媛県今治市野間甲 8  
 (URL) <http://www.imabari-nomauma.jp/>  
 (TEL) 0898-32-8155